

新編

NISHIO 第12号 2025.8.15 西尾市史だより

戦争特集



図1 大日本国防婦人会西尾町分会の活動

今年、アジア・太平洋戦争（太平洋戦争）が終わってから八〇年になります。現在、世界各地ではいくつもの戦争がおこなわれ、多くの人命が失われ、生活が破壊され続けています。そうした状況のなかで、日本もまた八〇年前までは戦争をおこなっていたことを振り返ることは、大きな意味をもっています。そこで、今回の『西尾市史だより』では、西尾市域での「戦争」というテーマで特集を組みました。

図1は、大日本国防婦人会西尾町分会の女性たちが前線の兵士に送るために集めた毛布を献納したときの写真です。割烹着を着て、「大日本国防婦人会」と書かれたタスキをかけるというのがこの会の活動時の服装でした。

写真のメモには「愛知県庁」とありますが、詳しくはわかりません。時期も確定できませんが、日中戦争が本格化してアジア・太平洋戦争が始まる一九三〇年代後半から四〇年代にかけてのことだと思われます。

日中戦争やアジア・太平洋戦争の戦場は、日本国内ではなくおもに中国やアジア各地でした。そして戦闘がおこなわれたのが「前線」であり、国内は「銃後」といわれました。西尾市域ももちろん銃後ということになります。銃後に期待される役割は、前線の兵士たちを支えることでした。

戦後八〇年に寄せて 「銃後」活動と戦中の暮らし

近現代部会 編集委員 岡田 洋司

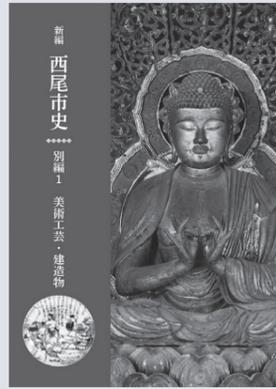
既刊 『資料編3 近世1』
A5判 790頁 本文モノクロ カラー口絵付
本文収録CD-ROMと三州幡豆郡吉良庄西尾城之図
複製(B2判)付 4000円



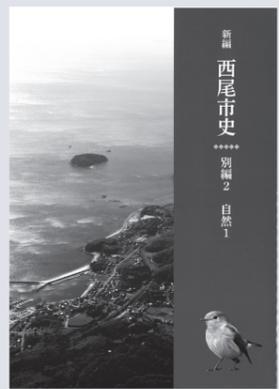
既刊 『資料編4 近世2』
A5判 758頁 本文モノクロ カラー口絵付
本文収録CD-ROMと三州幡豆郡吉良庄西尾城御
領分図画 複製(B2判)付 4000円



既刊 『別編1 美術工芸・建造物』
A4判 643頁 オールカラー 5000円



既刊 『別編2 自然1』
A4判 655頁 オールカラー
本文収録CD-ROM付 5000円



*『資料編2 古代・中世』と『通史編1 原始・古代・中世』は完了しました。

『新編西尾市史研究』

市史編さんのための調査・研究の成果を論文・調査報告・資料紹介の形で紹介します。

新刊 『新編西尾市史研究』第二〇号
A4判 134頁 本文モノクロカラー口絵付
1100円



●内容

「西尾の町庄屋と組頭について」「法応寺旧蔵滝家文書における本光院殿」「西尾城下の天王祭礼(祇園祭り)」「愛知県のトラフグ漁業をめぐって」ほか

既刊 第二号〜第九号

すべてA4判 本文モノクロ カラー口絵付
50051100円

各号の内容は『新編西尾市史』のホームページをご覧ください。

■頒布場所 西尾市岩瀬文庫

※祝日を除く月曜日・第3木曜日ほか
メールでお問い合わせください。



資料や情報をお待ちしています。

西尾市史編さんに役立ちそうな資料(古文書や市内で刊行された古い出版物など)がありましたら、ぜひ市史編さん室へお知らせください。

〈担当・問合せ〉

西尾市教育委員会文化財課 市史編さん室
〒四四五〇八四七
西尾市亀沢町四八〇 西尾市岩瀬文庫内
TEL 〇五六三―五六―八七一一
FAX 〇五六三―五六―二七八七
E-mail shishi@city.nishio.lg.jp

新編西尾市史だより第十二号

令和7年8月15日発行

大日本国防婦人会は、一九三二(昭和七)年に設立されました。陸軍省の後援を受け、公的団体として扱われ、出征兵士の見送りや留守家族の支援、傷病兵や遺骨の迎え、慰問袋の調製等々を銃後活動としておこないました。写真のような献納活動もおこなわれました。

この西尾町分会は一九三六(昭和十一)年一月に設立されました。この分会についての史料はないのですが、明治村分会米津班の史料が何点か残っています。そのなかに「国防婦人会員名簿」という書類があります。表紙には「昭和十二年十一月発会」と書かれています。一九三七(昭和十二)年七月の嵐溝橋事件(日中戦争の発端)後に発足したのでしょうか。一家から一人の「主婦」が参加することが基本でしたが、それとは別に未婚女性が参加することもありました。なお会員名簿には、会員名の下に「戸主」「配偶者」という欄があり、いちいち夫等の名前が書かれているのは、当時の女性の立場を表すものでしょうか。なお国防婦人会は、一九四二(昭和十七)年に同じような活動をおこなっていた愛国婦人会と合併し、大日本婦人会となります。

図1は、国防婦人会が毛布を献納したときの写真です。しかし、毛布に限らずさまざまな物資の献納は容易ではありませんでした。日中戦争開戦後の一九三八(昭和十三)年四月に国家総動員法が公布され、食料品・衣料品などの生活必需品も自由には買えなくなりました。また、一九四一(昭和十六)年八月には金属回収令が出され、家庭用品からお寺の梵鐘にいたるまで各種金属製品が回収されて大砲や銃の材料とな

りました。そうした状況のなかでは毛布の献納も相当に困難なことだったのです。図2と3は、中央通りの杉浦製靴本店のショーウィンドウです(現在は通りをへだてた場所に移り、「靴のスギウラ」になっています)。図1と同じ時期の写真でしょうか。「物価は公定 銃後は安定」「国護る心で守れ 公定価格」というスローガンがあり統制経済の下にあることを示しています。中央に「鮫皮」や「豚皮」という言葉が見えます。左下には、「活カセ古靴報国資源」と書かれ、古靴が積まれています。



図2 杉浦製靴本店のショーウィンドウ

輸入に頼った牛皮は不足しており、軍靴に優先的に回されました。そのため古靴を回収し再生利用したり、豚や鮫の皮で靴がつけられたりしたのでした。そうした再生品や代用皮革の靴も配給や割当制度の対象となり、自由には手に入りませんでした。この写真は、「銃後」の生活の一端を視覚的にはつきりと示すものです。戦争も末期になると前線と銃後の区別がなくなり、大都市・中小都市を問わず、アメリカ軍の爆撃を受けました。西三河では、岡崎市が爆撃により市街地の八割を焼失しました。西尾市域は、そこまでの被害はありませんでしたが、アメリカ軍の戦闘機が機銃掃射をおこなうようなことはありました。そして、一九四五(昭和二十)年八月十五日に、日本が全面降伏を受け入れたことを国民に伝える玉音放送があり、九月二日に降伏文書が調印され完全に戦争は終わりました。しかし西尾市域全体の戦没者は三九三〇人にも及びました。



図3 図2の一部拡大

こちら

近現代部会です。

幼稚園日誌に見る迫りくる脅威

近現代部会 執筆員

山下 廉太郎

一九四四(昭和十九)年七月九日にサイパン島が陥落すると、ここを拠点にしたB29による本土爆撃が熾烈を極めるようになります。また日本近海には空母が展開するようになり、そこから飛び立った艦載機による機銃掃射や爆撃も加わることで、日本各地において甚大な被害を受けることになりました。こうした状況は西尾も決して例外ではありませんでした。

旧市史『西尾市史』四)には、一九四三(昭和十八)年から一九四五(昭和二十)年までの「西尾地方空襲警戒警報発令状況」が掲載されており、太平洋戦争が末期に近づくにつれて、警戒警報・空襲警報の発令数が大幅に増加していることがわかります。また、西尾国民学校(現在の西尾小学校)・平坂第二国民学校(現在の矢田小学校)の一九四五年一月から八月までの学校日誌も旧市史にて紹介されており、空襲警報・警戒警報発令時には児童を退避させたり、帰宅させたりするなど、緊迫した学校の様子をうかがい知ることができます。

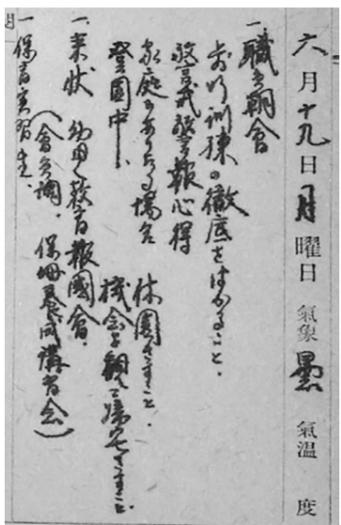
今回、市史編さんの活動のなかで、西尾町立西尾幼稚園(現在の西尾幼稚園)の一九四四(昭和十九)年度の幼稚園日誌を目にする機会がありました。そこからは、西尾国民学校や平坂第二国民

学校と同様に西尾幼稚園も、子どもたちを空襲による被害から守るための対策を講じていたことが判明するだけではなく、それまでの警戒警報から空襲警報へと次第に切り替わっていく緊張感もあわせて読み取ることができます。その一連の流れをここに示してみたいと思います。

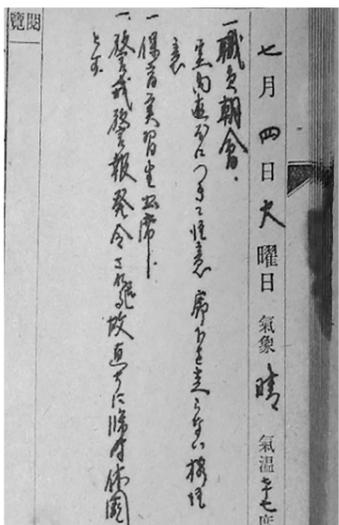
一九四四年六月十六日には、園児の在園中に警戒警報が発令されたことから臨時休園の措置をとる、「赤組は全部直ちに帰宅」「家の遠き者も同様直ちに帰宅」させたいと、その他の園児については午前中のみ「保育」しています。このことを受けてか、三日後の十九日の職員会では在園中以外の「警戒警報心得」として、園児が家庭にいる場合には休園に、登園中には機会を見計らって帰宅させることを決定します。その後の七月には、警戒警報による臨時休園の日数も増加し、冒頭に示したように、戦局も悪化の度合いを深めていきます。

九月二日と十月十四日の職員会ともなると、空襲警報時には園児を絶対に外出させないこと、空襲下における園児の取り扱いをそれぞれ取り決めて、いよいよ空襲に備えるという、最悪の事態を想定した対応へと変化が見られます。そして十一月十三日午前十時十五分、不意の空襲警報だったためか、この時は園児たちの取り扱いについて、多少の混乱があったようです。その後も空襲警報が発令された際、警防団の引率のもとに帰宅する園児たちの姿が記録されています。

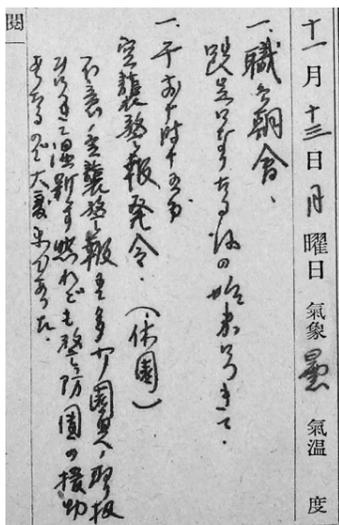
このように太平洋戦争末期には、園児たちの日常生活にも戦争の脅威が大きく影響を及ぼすことになりました。



6月19日 警戒警報心得



7月4日 臨時休園



11月13日 不意の空襲警報

※写真は『昭和十九年度 幼稚園日誌』(N384 西尾幼稚園資料)

こちら

近現代部会です。

お住まいの地域に日清戦争の 記念碑はありませんか？

近現代部会 執筆員

堀田 慎一郎

戦争記念碑が、歴史学研究の史料として本格的に注目されるようになったのはそれほど古いわけではなく、ここ二、三〇年ほどのことです。

近代日本において、地域に戦争記念碑が建立され始めたのは、一八七七（明治十）年の西南戦争からです。西尾市にも、歴史公園（西尾城址）に戦争直後に建てられた記念碑があります。

ただ、地域社会において戦争記念碑の建立が本格化するのには、何と言っても一八九四（明治二十七年）年から九五年にかけての日清戦争がきっかけでした。「眠れる獅子」などと言われ、アジアの大国と考えられていた清国に日本が圧勝した日清戦争が、日本人の意識に与えた影響は大きなものがありました。

戦争後、人々は競うように記念碑を造り、戦争の勝利と地域からの出征兵士を記念・顕彰しました。これは、様々な事業で戦争や出征兵士、その家族を支えた地域社会に、戦争や軍事を強く肯定する意識が根づいたことを示しています。軍国主義の形成の一端をここに見ることが出来ます。

現在の西尾市と範囲がおおむね一致する当時の幡豆郡の日清戦争記念碑については、楡山幸夫氏の

と羽賀祥二氏の研究があります。特に楡山氏は、現存する記念碑を一つ一つ丹念に調査して詳しいデータを収集・分析し、論文や著書で明らかにしました。これは西尾市にとって大変貴重な研究成果です。

ただ、楡山氏のこの研究が公表されたのは今から二四年前のことです。このたび、『新編西尾市史通史編3 近代1』を執筆するにあたっては、この研究を参照しながら、市史編さん室の協力を得つつ、あらためて地域の实地調査を行いました。

その結果、楡山氏が調査した際には現存していた記念碑の一つが、一〇年余り前に撤去されていたことが分かりました。あるいは、楡山研究の前にも同様のことがあったかもしれません。宝珠院に残る記念碑は、太平洋戦争後、占領軍を恐れていた人は表面を削り取って廃棄されたと伝わります。

また、数年前に市史編さん室が実施した文化財調査で撮影された写真を確認すると、楡山研究には掲載されていない記念碑が二基見つかりました。この文化財調査は、寺社を悉皆調査したわけではなく、ほかにも記念碑が現存している可能性はけっこうあるのではないのでしょうか。



明治二十七八年役記念碑
上町下屋敷、実相寺境内、1897年建立

現在執筆中の『通史編3 近代1』では、現存する日清戦争記念碑については、実相寺（二基）、八ツ面町久麻久神社、熊味町久麻久神社、厳西寺、養寿寺、通西寺、「室町」交差点付近、寺津小学校（二基）、白山神社（西浅井町）、宝珠院、正法寺、富田神社、前野神社、一色東部小学校、満国寺、赤羽別院親宣寺、神明宮（東幡豆町御堂前）にある一九基として書いています。そのほか、米津神社には日清・日露両戦争合同の記念碑があります。

これら以外の日清戦争記念碑をご存じでしたら、ぜひ市史編さん室までご一報ください。かつて存在した廃棄されたという情報でもけっこうです。まだ今回の市史に間に合うかもしれません。最後に、今回の实地調査で感じたのは、建立から一二〇年以上が経過して、碑面が劣化して碑文が読み取りづらくなっているものが少なくないことです。日清戦争記念碑は、貴重な文化財として後世に残すべきものです。ただ、安全性等の観点から、どうしても撤去せざるをえない事態もあるかもしれません。万が一に備えて、今のうちに碑文を正確に記録しておく必要があると考えます。



征清紀念之碑
吉良町乙川、正法寺境内、1897年建立

市史編さんの現場から

本土決戦と陣地壕

市史編さん室

神尾 愛子

アジア・太平洋戦争（太平洋戦争）末期、一九四四（昭和十九）年七月にサイパン島が米軍の手に落ちると、大本営陸軍部は日本本土での大規模な地上戦を想定し、「本土沿岸築城実施要綱」を示しました。これにより各地で砲台や陣地（防衛・攻撃の拠点）の構築が始まり、愛知県内では十一月に渥美半島の太平洋沿岸で、さらに十二月には三ヶ根山の西側と東側の麓、現在の西尾市の三和・室場・吉良地区と幸田町、蒲郡市の丘陵地でも陣地壕の構築が開始されました。米軍が上陸して名古屋へ進攻する場合、これを迎え撃つためです。

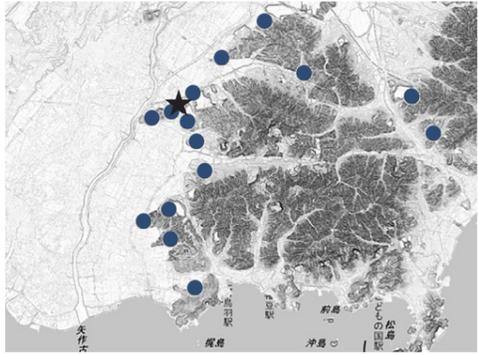


図1 陣地壕が確認された場所
清水1996に基づいて作成



図2 吉良町瀬戸に残る陣地壕
(図1の★)の内部

この地域に作られた陣地壕は、丘陵の上や麓に洞窟状、トンネル状の穴を掘り、周辺の監視や攻撃の拠点、武器弾薬の保管など用途とするものです。幅・高さとも二m程度、入口は爆風除けのために屈曲し、機関銃や歩兵砲を撃つための孔が開いたものもあります。過去の研究（清水1996）では、三ヶ根山麓に三〇か所余りの陣地壕が確認されており、その多くはすでに失われていますが、吉良町岡山・瀬戸・友国・饗庭では現在も遺構を確認することができます。

これらの陣地壕を構築したのは、鳥取や岡山から来た補充部隊で（後に名古屋の部隊と交代）、近隣の寺に駐屯し、三河地震の際には被災者の救援にもあたりました。しかし、装備や食料は乏しく、花岳寺（吉良町岡山）にいた部隊では犬を食べたり、地元住民が保存していた種芋の盗難騒ぎも起きたそうです。

米軍による空襲が激しさを増すなか、一九四五年六月には義勇兵役法が公布され、兵役についていない十五歳から六十歳の男子、十七歳から四十歳（県内の運用では六十歳以下）の女子は国民義勇隊に所属し、軍の補助作業をしたり、事態切迫時には戦闘員として軍の指揮下で戦うことが定め

られました。七月には軍から横須賀村の国民義勇隊に対し、陣地壕構築への参加が要請されました。

一方で、大学・高等学校および専門学校・中等学校の学生・生徒は「学徒義勇隊」の隊員として、男子には軍事訓練、女子には救護訓練が行われました。なかでも中学生の男子は各校から数名が選ばれ、軍のもとで一定期間、本格的な軍事訓練を受けました。西尾市域では一九四五年六月から七月にかけて一色の諏訪神社で二週間の訓練が行われ、ここに西尾中学校から四名の生徒が参加しました。体験者の証言によれば、行進や木銃を用いた銃剣術、野戦訓練、またタコツボと呼ばれる一人用の壕に爆弾を抱えて潜み、敵の戦車の下に投げ込んで爆発させるという「特攻訓練」も行われました。

現実には、八月のポツダム宣言受諾によって本土決戦は行われませんでした。しかし、今も市内にひっそりと残る陣地壕や体験者の証言は、この地域でも本土決戦、「一億玉砕」のための準備が確かに進行していたことを教えてくれます。

【参考文献】

- 清水啓介「三河湾北部の陣地壕について」『あゆみ』第3号 1996 / 伊藤厚史『愛知県史 別編 文化財1 建造物・史跡』2006 / 鈴木悦道『吉良町こぼれ話』2014 / 西中19回・西女28回・西高1回生同期会（幸喜会）『私達の戦中・戦後』1989

主な活動記録

(令和7年3月～7月現在)

編さん委員会 5月29日

編集委員会 6月15日

考古部会／古代・中世部会

●『別編5 年表・索引』の構想検討

近世部会

●『通史編2 近世』の構想検討・史料調査

部会

6月1日

●資料調査

東京大学史料編纂所・東京文化財研究所・

国立国会図書館

●寄託・寄贈・購入資料整理

西尾藩士鈴木藤左衛門家文書・上町稲垣幸男家文書・

西幡豆町鈴木家梅田文左衛門納経帳・吉田村文書・刈

谷市滝頭治寄託資料・碧南市藤井旭氏寄託資料ほか

近現代部会

●『通史編3 近代1』の執筆

●『通史編4 近代2・現代』の構想検討

●部会

3月7日・7月30日

●『通史編3 近代1』原稿検討会

5月4日・6月7日・7月3日・7月26日

●資料調査・聞き取り調査

靴のスギウラ（高砂町）・宝珠院忠魂堂（吉良町吉

田）・愛知県図書館・愛知県公文書館・愛知県庁

●寄託・移管・購入資料整理

吉良町岡田幸子氏寄贈資料・上町小野山京子氏寄贈

資料・愛知県立蚕糸学校関係資料・刈谷市小野田晃

氏寄贈資料・吉良町吉田牧孝夫氏寄贈資料



宝珠院忠魂堂調査

自然部会

●『別編3 自然2』の構成検討

部会

5月24日

●市内の植物・化石調査



『新編西尾市史』 刊行のご案内

●平原の滝葉師堂 特別公開

4月19日（土）



平原の滝葉師堂 特別公開

『新編西尾市史』は、平成23年4月の西尾市・一色町・吉良町・幡豆町の合併により誕生した新しい西尾市の姿を歴史・文化・自然・美術・民俗などのさまざまな視点から明らかにするものです。通史編・資料編・別編の合計14冊の刊行を予定し、これまでに8冊を刊行しました。

●販売場所

西尾市岩瀬文庫・西尾市資料館・一色学びの館・尾崎士郎記念館・西尾市塩田体験館

※休館日は各館のHPでお確かめください。

●通信販売

西尾市史編さん室（次頁参照）までメールでお問い合わせください。

民俗部会

●『別編4 民俗』の執筆

部会・原稿検討会

4月23日・4月24日・6月13日・

6月14日・7月24日

●市内の民俗調査

三河木綿保存会ほか

調査にご協力いただいた皆さま、情報をお寄せいただいた方々へ心より感謝を申し上げます。



『新編西尾市史』 関連行事

『新編西尾市史 別編1 美術工芸・建造物』と『新編西尾市史 資料編4 近世2』の刊行を記念し、西尾市岩瀬文庫特別展「隠れた宝、再発見。」と関連行事を開催しました。

●特別展「隠れた宝、再発見。」

会期 令和7年2月22日（土）～5月18日（日）



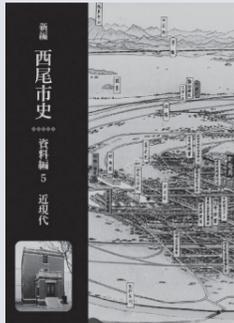
●新刊 『資料編5 近現代』

『新編西尾市史』資料編の最後の巻となる『資料編5 近現代』を刊行しました。一八七二（明治四）年の廃藩置県から一市三町が合併した二〇二二（平成二十三）年までの西尾の歴史を物語る資料439点を活字化して紹介しています。

A5判 830頁 本文モノクロ カラー口絵付

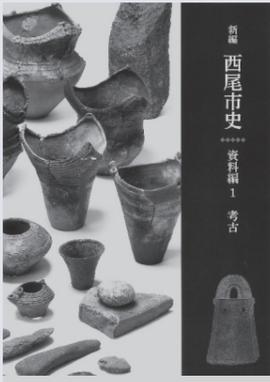
本文収録CD-ROMと「愛知県幡豆郡全図」

「碧海郡全図」複製（B2判）付 4000円



●既刊 『資料編1 考古』 残部僅少

A4判 790頁 オールカラー
西尾市の遺跡位置図付 5000円



塩村耕氏の講演会

いずれも会場は西尾市岩瀬文庫地階研修ホール 定員70名

●展示解説

3月8日（土）・4月5日（土）

●講演会

①「江戸時代の西尾の村々と村人たち」

講師 神谷智氏（愛知大学教授）

開催日 3月2日（日）

②「矢内樫秀と西尾市内の個性派仏画」

講師 鷹巣純氏（愛知教育大学教授）

開催日 3月23日（日）

③「殿様の絵画―松平乗元から乗主へ―」

講師 神谷浩氏（徳川美術館副館長兼学芸部長）

開催日 4月13日（日）

④「西尾の奇人」

講師 塩村耕氏（名古屋大学名誉教授）

開催日 4月27日（日）

⑤「西尾の仏像」

講師 山岸公基氏（奈良教育大学教授）

開催日 5月11日（日）